2016 SUPER GT Rd.2 FUJI

SCENT TO THE TOP

「雪に閉ざされた山頂への挑戦」

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
DIGITAL
2016
Panasonic
AUTOBACS
8
Mobil
BRIDGESTONE
Holts
TAKATA
WORK

雄大に聳える富士の山頂には、まだ真っ白な雪が残っている。
しかしその麓にある富士スピードウェイに肌寒さはなく、
ゴールデンウィークの真っ只中とあって5万人以上の観衆が詰めかけ熱気に溢れている。
3月にテストをしたときとはコンディションが大きく異なるせいか、
GT500クラスを戦う8号車のARTA NSX CONCEPT-GTは煮詰めていたはずの
セットアップが上手く機能せずマシンバランスに苦戦。
しかしGT300クラスの55号車ARTA BMW M6 GT3は走り始めから好感触で、
電源が突如落ちるトラブルに見舞われフリー走行の大半を失いながらも
予選でポールポジションを獲得する走りを見せた。
「トラブルさえ出なければ表彰台を狙えるよ！」
決勝を前に、土屋圭市エグゼクティブアドバイザーも上機嫌だった。

小林「マシンバランスは良いと思いますよ、
これ以上は求めすぎても良くないんじゃないかっていうくらい。
温度もこれ以上は上がらないだろうからタイヤの剛性感も大丈夫だと思うし、多分行けると思いますよ」
スタート前のウォームアップでマシンのフィーリングを確認した小林崇志も、好感触を得ていた。

決勝が始まると、小林は後続を引き離し始めた。
小林「プリウス（31号車）のペースは？」
一瀬「1分40秒5くらいだね。今39秒台は小林さんだけ。
このペースでいけば結構ギャップを作れるから、このままいこう」
小林「了解」

エンジニアの一瀬俊浩に31号車のペースとギャップを確認しながら、
小林は順調に周回を重ねていき、高木真一にバトンを渡す。
総距離500kmの長丁場では、2ストップが必要になる。
スタートドライバーの小林は、最後にもう1スティント走ることになる。
各車が最初のピットストップを終えると、
トップに浮上してきたのは31号車ではなく3号車のGT-Rだった。
BMW M6 GT3はハイパワーな反面、燃費が良いとは言えず、
ピットストップ時の給油に長い時間を要してしまったからだ。
二度のピットストップを行なう500kmという距離だけに、
そのハンディキャップはより大きく響いてくる。
土屋「真一、3号車に追い付くぞ！ 頼むぜ！」
土屋が高木にハッパをかける。
高木「GT-R速いねぇ」
そうは言いながらも、高木には余裕が感じられた。

POTENZA
Mobil 1
BRIDGESTONE
HONDA
Panasonic
AUTOBACS
PIT-PRO
8
zf.com/jp
BRIDGESTONE
TAKATA
Coca-Cola
WORK
Holts
PROSTAFF
Calm
CAR MATE
PIAA

土屋「タイヤを労りながらじわじわプレッシャーを掛けていこう。
残り10周を切ったらプッシュだ」
一瀬「今レースしているのはGT-Rとウチだけで、向こうのペースを見ながら
ピットインのタイミングを決めるけど、GT-Rにペースに付いていく余裕はある？」
高木「余裕です、余裕」
一方、GT500クラスを戦う8号車は、セットアップはなんとか合わせ込むことができたものの、
マシンのパワー低下に苦しんでいた。
スタートドライバーを務める野尻智紀が、ディスプレイに警告灯が点いていることを訴えてきた。
富士の気温が高くなったせいか、どうやらエンジン排気温度が上昇しているようで、
出力を下げる設定にせざるを得なくなった。

野尻「スリップストリームについてるから点いちゃうの？」
星「そうかもしれない。ストレートで半車身くらい離すとかしてみようか？」
エンジニアの星学文が、マシンに風を当てて冷やすようにアドバイスするが、野尻は拒否する。
野尻「無理だって！ 後ろだって来てるんだから、前についていかないとさぁ！」
野尻からの無線は悲痛だった。
野尻「警告が点きまくり。スゲェ勢いで抜かれる……」
星「ペースは6番手を走ってる15号車と変わらない。
良いペースだから。ストレートだけ頑張って」
野尻「もう、ストレートめっちゃくちゃ遅いから！」

普段はもの静かな野尻だが、ステアリングを握ると人が変わる。
「アイツ、コクピットではオラオラ系だから（笑）」
松浦孝亮がそう言って笑う。
その松浦が第2スティントを上手くこなし、39周を走行。
松浦「リアの動きがキツい。ブレーキを踏んだらロックしてる」
路面温度の上昇によってタイヤのフィーリングと摩耗は厳しくなっているが、
松浦はベテランの味でそれを上手くコントロールし、排気温度の問題も落ち着いてきた。

AUTOTRACS
project
corona

最後にまた野尻にバトンタッチし、8号車は入賞圏内でレースを進める。
野尻「17号車を抜いたよ」
星「了解、ポジション7。後ろは1周遅れだから、100Rとか無理しなくていいよ」
野尻「ダメだ、リアを庇おうとするとすぐにピックアップが付いてきちゃうから、そんなことできないね」
事実、バーストに見舞われているマシンも散見される。
そんな矢先、残り4周というところで首位を走っていた12号車GT-Rが
やはりバーストに見舞われてリタイアを余儀なくされた。
星「100Rで12号車が飛び出したから、デブリだけ気をつけてね」
これで野尻は6位に上がり、ARTAにとっては久々のポイント獲得を果たした。
星「お疲れ様です、ポジション6、良くやった！」

ARTA DIGITAL 2016

厳しい表情が多かった鈴木亜久里監督にも、ようやく笑顔が見えた。
「クルマにはまだまだ改善しなければならない問題が山積みだけど、
そんな状況の中、ドライバーとチームは良く頑張ってくれたね。
評価出来るレースだったと思う。粘り強いレースをして、次も良い結果を出したいね」
一方。GT300クラスを戦う55号車は、最終スティントに向けて悩んでいた。
ミディアムタイヤで行くのか、ハードタイヤで行くのか。
第1スティントを走った後の小林のタイヤを見ると、フロントの摩耗はかなり厳しかった。
高速の100Rで舵角を抑え、タイヤを労るドライビングに徹すれば、
ミディアムタイヤで走り切ることもできる。コクピットから高木はそう提案した。
しかし、ドライバー交代の準備をする小林の意見は違った。
小林は攻めのドライビングがしたかったのだ。
もちろん、コース上で3号車GT-Rを抜き去るためだ。

土屋「真一さ、勝負掛けるんだったらフロントは
ハードじゃないとダメだって小林が言ってるけど、
どうするよ？」
高木「分かった、じゃあそうしていいよ。
小林に決めさせて」
一瀬「じゃあフロントハードにしよう」
守りの走りで2位フィニッシュではなく、
攻めの走りで優勝をもぎ取りに行く。
コクピットに乗り込み、再びコースへと
舞い戻っていく小林の決意は強かった。

一瀬「無線聞こえる？」
小林「大丈夫、頑張ってくるよ！」
土屋「頼むぞ、小林！」
小林はハイペースで周回を重ね、
タイヤ無交換でピット時間を短縮し前に出ていた
25号車を抜き去り、首位の3号車GT-Rとの差を
毎ラップのように詰めていく。
コンマ1秒でも、コンマ0.1秒でも、速く走りたい。
絶対に優勝をもぎ取りたい。
小林のそんな思いがヒシヒシと伝わって来た。

小林「エアコンでパワーダウンする？」
一瀬「多少は。あと10周、ギャップ11秒。頑張って！」
それを聞いた小林がエアコンをオフにし、
蒸し風呂のようなコクピット内の暑さに耐えながらプッシュしていく。
一瀬「ギャップ10秒、1周1秒縮めてるよ」
首位3号車との差は8秒、7秒、6秒、5秒とどんどん縮まっていく、
しかし、無情にもチェッカードフラッグ。最後の最後までプッシュを続けたが、
僅かに3.749秒届かなかった。
土屋「小林、お疲れさん。よくやった、よく頑張ったよ」
小林「ありがとうございました。悔しい。でも壊れなくて本当に良かった」
土屋「そういうことだよ、小林。壊れなくて本当に良かったよ」
小林「次に期待しましょう」
そうは言っても、悔しさを抑えきれなかった。今季初の表彰台に立ったというのに、
55号車の2人には全く笑顔がなかった。

周囲はその様子をいぶかしんだが、絶対に勝利をもぎ取るという強い気持ちで臨んでいたのだから、
2人にとっては当たり前だった。
「勝つには給油時間が長すぎるんだよなぁ。
給油時間をなんとかしないと勝てないよ、これ。燃費を考慮したペースなども考えなおさないとね」
土屋がこぼした。
勝つための速さはある。しかし、勝つためにはもう一歩チームとしての前進が必要だった。
8号車、55号車ともに、間違いなく進歩している。
だが、雪に閉ざされた富士の山頂のように、どんなに手を伸ばしても今は手が届かない場所もある。
大切なのは、その雪が溶ける時にそこへと辿り着くための準備をしておくことだ。
その手応えは、この5月の富士で充分に掴めたはずだ。
背後に聳え立つ富士の雄姿も、彼らにとって今はもう少し小さく見えていることだろう。

ARTA DIGITAL 2016

RESULT

GT500

ARTA NSX CONCEPT-GT

松浦　孝亮 / 野尻　智紀

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
10位	6位	1'00.064	1'30.865	9位

GT300

ARTA BMW M6 GT3

高木　真一 / 小林　崇志

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
1位	2位	3.749	1'38.371	4位

ARTA
Project
ARTA
Project
ARTA
Project

株式会社オートバックスセブン

ARTA Project

ARTA DIGITAL
Youtubeチャンネル

To be continued next race.....

Team ZEROBORDER

Copyright c2014 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA
Text : Mineoki YONEYA
Design and Web Creator : Akira YOSHIDA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD